

椎の苗木通信



夢・力・花いっぱい

木城町立木城中学校

Tel 0983-32-2028

Fax 0983-32-4191

木城の明日を担う心豊かでたくましい人づくり

(木城町教育大綱の基本理念)

火災に対する避難訓練

1月11日(木)、6校時に火災を想定した避難訓練を実施しました。理科室で火災が発生し、防火シャッターが降りていることを想定し避難しました。

校内放送で、火災が発生したことを知らされ、避難を開始しました。生徒は一旦運動場へ避難し、その後、技術室で煙を充満させ、火災時の煙がある中での体験もしました。



この日は、東児湯消防組合の署員が来られ、生徒が避難する様子の感想や火災発生時の避難について話をされました。この訓練をきっかけに、ご家庭でも火災防止に努めてもらいたいと思います。

綾照葉ソフトテニス大会結果

1月7日(日)に、綾町でソフトテニス大会がありました。今年で22回になる伝統的な大会で、2年生の田中茉利奈さん、中武凜さんペアが2年生の部で3位となりました。賞状とメダルが2人に

それぞれ授与され、全校集会で披露されました。おめでとうございます。

子どもに手伝いを

最近の子育ての中で問題なのは、子どもには仕事(手伝い)を与えないで、勉強さえしていればよい、という考えをもつ親がいることです。「生きる楽しさ」の伴わない勉強では、本当の力はつきません。「生きる楽しさ」というのは、子どもが周りの人たちの役にたつ働きをし、その人たちから喜びや感謝が返されたときにできる思いです。

そのためには、家の中で何か仕事を与えることです。ところが、仕事の与え方が「あれをきなさい。これをきなさい。」という押し付けになっている場合があります。そうすると子どもは仕事嫌いになって、勉強もしない、ということになってしまいます。仕事というものは、命じてやらせるものではなく、仕事に誘い込み、働くことに喜びを与えることです。そのためには「〇〇ちゃん、力貸して、助けて、知恵を貸して、教えて」という形で謙虚に頼むことです。すると、助けてと頼まれていやだという子どもはいませんから、必ず手伝ってくれます。

子どものことですから、大人のようにうまくいきません。そのときに「もっと上手に」と言ってしまうとだめです。後で直さなくてはいけないと分かっているでも「ありがとう。助かった。うれし

いな。また助けてね」と、感謝とお礼を言います。
すると、子どもに親の役に立てたという満足感が生まれ、また助けたいと思うようになります。そのような中で「勉強の時間まで取って悪かったね。大丈夫」と言うと、「うん、大丈夫。やれるよ」と勉強の方も努力するものです。

子どもが家の手伝いをする機会をつくってもらえればと思います。

県読書感想文コンクール入賞

平成 29 年 11 月 16 日に行われました宮崎県読書感想文コンクールにおいて受賞した生徒を紹介します。

➤ 県三席

1 年 徳田 仁洸 くん

➤ 県佳作

3 年 松村 香幸 さん

2 年 濱砂 慧花さん

2 年 山田 美華さん

1 年 中下 大和くん

以上、5名の皆さんおめでとうございます。

< 今後の予定 >

➤ レベルアップタイム 2/13(火)~2/15(木)

➤ 学年末テスト 2/14(水)~2/16(金)

➤ 県立高等学校入学者選抜検査

3/6(火)・7(水)

➤ 第 71 回卒業式 3/16(金)

➤ 修了式 3/26(月)



➤ 夜光雲(やこううん)

1/18Thu.

6:20A.M.

木城中学校で撮影

校長 雑感

人生に失敗がないと、人生を失敗する。

斎藤茂太さんの文章を紹介します。斎藤さんは医学博士で、精神科医。歌人・斎藤茂吉の長男であり、弟は作家・北杜夫です。

最近の若者にはどうも覇気を感じない。これは私のせりふではないので、念のため。仕事でお目にかかる会社経営者の方々などが口癖のようにこう言われるのだ。とは言え、精神科医という立場からも、これにはまったく同感できる。こんな些細なことでは？と首をかしげてしまうようなことで精神のバランスを崩し、精神科を訪れる患者さんが急増しているからである。(中略)

最近の若い人には、思うようにいかないことに耐える力、専門的に言えばフラストレーション・トレランスの急激な低下が見られる。原因は、家庭で我慢することを教えなくなったからだ、と私はにらんでいる。

我々の時代、子どもとは、ひたすら我慢を強いられる存在だった。何かほしいと言えば、正月になったらとか、成績がよかったらなどと言われ、その日まで欲望を抑えて待つことを教えられた。二番目、三番目に生まれた子どもなど、上の子の使い古しの「お古」を使わされた。一度でいいから新品を使ったかったと述懐する人がいるほどだ。

昔は貧乏でモノが不足していたからだろうか。私はそうではないと思う。昔の親は、辛抱させる、我慢させることがいかに大きな意味を持っているかを、体験上、熟知していたからだと思う。最近の子は、おもちゃ屋が引っ越してきたのかと思うほどの玩具に囲まれ、多くの場合、二人の両親と四人の祖父母からかわいがられ放題にかわいがられる。欲しいものは何でも手に入り、足らざることを知らぬまま育った子どもに、フラストレーション・トレランスが発達するわけがない。ちょっと気に染まないことがあれば簡単にキレたりしてしまうのだ。

だが、子どものようにヌクヌクした環境で、一生過ごせる人は、そうはいない。私がそうだ。東京でも指折りの大きな病院の跡取り息子として生まれ、世間的に言えば、何不自由ない身の上であるはずだった。だが、震災や戦争に見舞われ、人生は山あり、谷ありの波瀾万丈だった。お金の苦勞もイヤというほどしてきた。だが、だからこそ、いま私は「自分の人生はおもしろかった」と言えるのだと思う。何ひとつ波乱がなかったら、人生は実に味気ないものになってしまうだろう。

「いい言葉はいい人生をつくる・成美堂出版」より

親であれば誰しも、子どもに苦勞をさせたくはないと思うでしょう。しかし、子どもの人生にずっと付き添って、困難から守ってやることなどできるはずがありません。中学生はあと数年で成人し、一人前の社会人として世の中に出ていかなければなりません。

苦勞させないことよりも、苦勞しても立ち上がる力、厳しい環境でも生き残る力を育んであげることこそが、今の時代、子どもの将来の幸せのために、親ができることなのではないでしょうか。